
阿修羅華

ほしぞらひかり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

阿修羅華

【Nコード】

N1533M

【作者名】

ほしぞらひかり

【あらすじ】

時は昔の魔法界。闇が世界を覆い尽くそうと広がっていた。そんな世に、闇にありながら、孤高に輝く月があった。ヒトは、月に吸い寄せられるように刃を握る。愛する者を、世界を護ろうと刃を振るう修羅があった。 歴史に残る魔法界大戦が幕を開ける。

創世記（前書き）

始まりの前に終わりがあつた

終わりのずっと前に始まりがあつた

終わりの前には途中があつた

だから私は 標しるべの無い道を行く

創世記

昔 神が世界をお創りになった

海があり 陸があり 空があり 命があつた

人が創られた

男をアダム 女をエバといった

ふたりはやがて 禁断の果実を口にした

ふたりはエデンの園をおわれた

新たな地で エバは子供を生んだ

地を耕す兄をカイン 家畜を飼う弟をアベルといった

ふたりは成長し 神に捧げ物をした

神はアベルの捧げ物のみを受け入れられた

カインは激しく怒った

カインはアベルを誘い 殺した

アベルは死んだ

死んだ肉体から魂は離れ からだ 新たな異なる世界へ行った

女に近い悪魔が神から遣わされていた

悪魔はアベルに云った

「私の力を与えます 代わりに私を人間の女にしてください」

アベルは受け入れ 悪魔を人間の女に変え妻とした

かくして 魔力を持つ人間が生まれた

アベルは魔力溢れる新世界の王となった

アベルの世界に 数多くの命が満ちた

時が流れ アダムの子孫が次元の歪に落ちた

彼らは魔力を持つ者を恐れ アベルを“魔王”と呼んだ

最初の世界には悪がはびこった

神は大洪水をおこし 最初の世界を滅ぼされた

ノアとその一族だけが 方舟に乗り生き残った

このことから 繋がる三つの世界には呼び名があった

最初の世界は“ノアの世界”

魔力溢れる世界は“アベルの世界”

三つめの世界は“アダムの世界”と呼ばれた

そして時は流れ 歴史が生まれた

創世記（後書き）

この世に真の平和が訪れる日を願って。アーメン。

連載開始を宣言いたします。

審判者（前書き）

夜の帳の降りた国

星のボタンがとまり

月のブローチが胸を彩る

審判者

魔法界にも国がある。

そして、国を統べる王も存在する。

王は皆、世界を統べる資格をもっている。

女王も幼い王も関係なく、強大な魔力を持ち、選ばれた王がその地位を得る。

かつて、祖先アベルも就いた頂点。

繋がる三つの世界の均衡を守り、全ての魔を天秤に掛ける王。“審判者”。

審判者は『アベルの後継者』を名乗る。

アベルの残した強大な魔力を秘めた杖“審判の天秤”に選ばれた王が、世界の鏡となり統治する。

今から二千年ほど前にも、審判者たる王がいた。

これはその当時の王と、起こった大戦の物語である。

審判者（後書き）

ここまでがプロローグです。
皆さまおつかれさまでした。

本編は次回からです。

物語の始まり（前書き）

万華鏡に在る硝子の欠片

一度動けば景色は何処へ

物語の始まり

魔法界に存在する国“聖安国”。

そこは、若い女王に統治される四季のある東の国。

女王の名はアリア・セシリア。

世界が始まって以来、初めて審判の天秤が選んだ女性審判者だった。

女王アリアは“滝つぼの国”というエルフの国の女王だったが、いまはその国は水底に沈み無く、今や民の移住した聖安国の王となっている。

アリア女王が王位に就いて二年。

国は美しく栄え、世界は平和に満ちていた。

——見かけだけは

？

“夜の一座”という組織があった。

“陰の一座”をひな形に作られた大きな闇の組織は、魔法界を我がものにしようとしていた。

一座の長はグイル・ジャステイス。

“闇の王”とまで呼ばれる、若いが強大なまあ力と闇を持つ男だ。

彼は、主に迫害や人種差別などで傷つき、世界を憎む者を中心に組織を大きくした。

また、生活は豊かで一見幸せそうに見える者の所へも、やって来てはそれを取り込んだ。

人は誰でも闇がある。心の闇が広がったところを彼は突き、その闇を広げ暗黒面へ引きずり込むのだ。

組織は既に、世界を相手に戦争をできる程にまでに大きくなっていた。

まだ大きくなっている。

？

さて、ゲイルが相変わらず手下に悪い事をさせている頃。魔法界の全国王が集まっていた。
場所は聖域“エデン”。

かつて、祖先アベルが開いた土地とされている。

「ご決断を、月姫様」
人間の王が言った。

「一国が既に、一座に滅ぼされているのですぞ」
別の人間の王も言った。

「すぐにでも戦争を起こさねば、世界は闇に呑まれることになるでしょう」

エルフの王もそう言う。

「……………」

黒髪のエルフの混血の女王は黙っている。

「審判者月姫。全ては貴女の判断で決まります。賢くご決断されよ」
老人むき出しの小人族の王はそう言った。

「我らは月姫の決断に従うのみです」
中国風の、戦闘民族の刀矢トヤの王が言った。

しばし時が流れ、審判者月姫、聖安国の半エルフの女王は顔を上げた。

凜とした、息をのむほど美しい瞳孔までも青い両の眼が、王たちに向けられる。

王一同は姿勢を正す。

女王は高らかに、美しい声で宣言した。

「開戦です。各国は持ちこたえる戦力の全てを戦争に使ってください。
ただし——」

アリアの絶対条件を聞いて、大半の王が驚愕した。
少数の王は満足そうに頷いた。

物語の始まり（後書き）

戦争があつて歴史は築かれるといつても過言ではないことを見せつけるものを書きたいと思います。

ただ、その血にまみれた身体でも心だけは清らかに輝いた月姫の姿、しかと描写させていただきたく存じます。

ちなみに、前書きのアレはただの“うた”なので読まなくても全然問題はありません。

QUEEN（前書き）

私の愛する神さま

たとえ闇が降りようとも

私は貴方から離れません

離れようにも

離れる術は無いのですから

QUEEN

魔法界のどこかの国にて。

「オイ聞いたか？アルマゲドンを使つての戦争が始まるらしいって」

「知ってるよ。大戦だろ。昨日、エデンに王が招集されたらしい」

「アルマゲドン使用の大戦といやあ、審判者の同意が必要だろ？同意したのかい。月姫様は」

「したらしいよ。平和主義者かと思つてたがね」

「何だお前知らないのか？月姫様は条件付きで同意しなすつたんだよ」

「条件？？」

？

「条件、^{ただし}とは？」

人の王の問いに、審判者月姫は答えた。

「これは大戦です。何が何でもアルマゲドンを使用します。

それから、兵隊以外を無理やり兵にしないこと。彼らから、彼らの戦いを奪うことはありません」

女王が言い終わると、東の刀矢（あまり魔力を持たない怪力の戦闘民族）の王が立ちあがり言った。

「仰せのままに。我らが審判者、アリア・セシリア王」

彼は刀矢族特有のルビーの瞳を、アリアのサファイヤより澄んだ青の瞳に向けた。

？

「へえ。良い事言うじゃねえか」

「流石は平和ボケした、死者を崇拜する国の王だ。ははっ」

そう言った男は、隣の友人に殴られた。

「いてっ！」

「バカヤローお前。彼の女王はな、マジ凄いだぞ。」

嫉妬深い王が聖安国を攻めた際、アリア女王はたった一人で全軍を壊滅させた話を知らねえか？」

「知ってるよ。有名なおとぎ話だ」

「いやいや。実話だよ」

「まさか。たった二十の小娘だぞ」

「嘘じゃねえ。オラのいところを見た」

「おっ」「ほう」

「いここは海の部隊にいたんだが、全てを理解したのは全てが終わった後。医療院のベッドの上だったそうだ。」

いとこの話はこうだ」

「聞かせてくれ!」「話せや」

「それは…月明かり美しい夜だったそうだった。

オラのいとこは、高い見張り台にいたんだ。

聖安国の月はそらあ見事だ。いとこは月を見ていたそうだった。

と、いとこは、月の中に竜を見た。細長い銅に、巨大な翼の珍しい竜だ。

いとこは竜の上にそらあ綺麗な女を見た。月姫様だったんだな。長くて綺麗な黒髪をよ、風になびかせ、月を背後につけて白竜の上に立っていた。

月女神のようだったと言ってたな。

オラのいとこは見惚れちまって、声も出なかった。

いや、オラのいとこだけじゃねえ。女神を見た全員だ。

だが、正気に戻れた奴がいたらしい。鐘が鳴らされた。

いとこは慌てて弓矢を構えたが、月を見た時にはもう女神は消えていたそうだった。

だがよ、かわりに……」

男はやがて言葉を切ると、惚けたように固まってしまった。

「オイ?」

「続きは?」

「かわりに…かわりによ、目の前によ、あの御方が立っておられたんだそうだ。

そして船を沈没させ、乗っていた全員を無傷で送り返しなすったんだ」

「あの御方？」「？」

男は、まるでそこにいとこの見た女神がいるような顔で、昇り始めた銀色の月を見上げていた。

？

聖安国の和風の城に、女がいた。

長く美しい黒髪は光を弾き、肌の色は白く、耳はエルフのように尖っている。

その両目は空と海を合わせるより青く透明で、瞳孔までその色なので、瞳孔の存在はわからない。

彼女、アリアは、昇り始めた朝日を眺めていた。

爽やかな朝の風が、アリアの髪にじゃれついては通り過ぎて行く。

赤い珠のような精霊が寄ってきて、アリアの顔の近くで漂いはじめた。

「おはよう」と言っているらしい。

小鳥のさえずりが庭に響いている。

聖安の一日が始まる。

QUEEN（後書き）

最初っからセリフのオンパレードでしたね。あはっ。

次回、『召集』。

キレーな兄ちゃんが二人、可愛い兄ちゃんがひとり、イケメンヅラした悪魔が一匹出てきます。

お楽しみに？

召集（前書き）

捧げるレクイエム

歌われるカプリッチオ

摩訶不思議なコッペリア

グランギニョル

奏でるのは暗がりの王女

召集

灰色の長い髪、整った顔立ち、黄色い双眸の吸血鬼の男が、城を歩いている。

彼が目指すのはアリアの職室だ。

彼が障子の前に立つと、スーッと勝手に戸が開いた。

「おはようございます、ルカ。私が最後ですか？」

戸を開けたのは、黒の長い髪に黒い双眸、着ている物も黒一色の、綺麗な顔をした者。

「お待ちしておりました、ロンド。いいえ。最後はドランです」

ルカはにっこりと笑って答える。

すると、上から声が降ってきた。

「私で最後？おかしいな。夜叉が最後かと思ったのに」

見上げるとそこには、灰色のローブを纏った、女の子に見えてしまう可愛い顔をした半獣のオス、ドランがいた。

口調の割に慌てて来たらしく、いつもは半ポニーにしている灰色のロングヘアを全部下ろしている。

「夜叉はもう来てます。姫様と談笑中ですよ」

「あらら…」

ドランは口到手を当てる。

本当に女にしか見えないが、ルカはそれを可愛いと思っているのでやめさせようとはしない。

それはロンドも同じのようで、決して「女っぽいぞ」的なことは言わない。

「入口の殿方、早く入りなさい」

奥からアリアの声がする。

さんにんは入って、鍵を確かめると奥へ進んだ。

？

奥にいたのは、さつきも話していた夜叉という男。

紫がかった黒髪は腰まで長く、その整った顔には刀矢族特有の紅玉色の眼が光る。

魔力は刀矢族にしては強い、東の刀矢の二番目の（末っ子）王子である。

以上が“四大修羅”と呼ばれる、アリア女王配下最強のよにんで、女性の人気は勿論、夢見る男たちからも人気の高い、アリア込みの“モテ集団”である。

アリアはとりあえず座っている。

お仕事なので、軽く結われた髪にちゃんとかんざしをさしていた。

「え、皆ももう知っているとは思いますが、Armageddon使用の世界大戦がはじまる」

アリアはサラっと言いのけた。

「ええええええ!! マジすかあああああ!!!」

これにはルカ、ドラン、ロンドが反応する。

ちなみに今その場合は、美女ひとり美男さんにん？の美形空間が建設されていて、宝石箱のような状態にある。

勿論、本人たちは自覚していないが。

「え？知らなかったの？」

「知りませんよそんな話！」とルカ。

「ロンドさんは知っていたんじゃないの？王佐なんだし」とドラン。

「いえ。あ、もしかして寝てたんですかね。私？」とロンド。

これは本格的に知らなかったのかとアリアは溜息をつく。

「何で兵は勿論、民まで知っているコトをキミらは……」

「俺は父上から聞いてたけどね。朱雀（兄）なんてヤル気満々だったよ」

夜叉もバツサリと言ってくる。

「あ、もしかして、だから夜叉王子は泊まり込みしだったの？」

昨日から聖安に滞在中の夜叉に、ドランが言う。

「その通りさ」

「夜叉…ありがとう」

何かふわふわした空気が漂った。

「とにかく、要は戦前の集会というワケですね？」

ルカが空気をブチ破って言う。

「チッ」

「そうよ。夜叉、どうかした？」

「別に」

「ふゝん？」

ややあつてアリアは、愛刀の“フィアン”を持って言った。

「たくさん、死ぬんだろうね。今日は、コレを言いたくて呼んだんだけど…」

本件来たか、と、皆が姿勢を正す。

「みんな、死なないでね」

え？となった。

え？それだけ？みたいな。

「姫様、あの、それ…だけですか？」

ルカが代表して聞く。

「うん。それだけよ？」

アリアはきょとんと返してきた。「当り前でしょ？」と。

「そうですか。陛下らしい」

ロンドが言っのを筆頭に、そうだそうだの声が上がる。

「ほえ？何？何？」

戦争前とは思えぬ爽やかな笑い声が、そこに満ちた。

「な・何なのおゝ？」

召集（後書き）

美形フェスタは続くのであります。

次回、闇の王現る。こっちは美形か？否か？
作者的には不明。

月姫と魔王（前書き）

全てを超え

全てを凌駕し^{りょうが}

全てを統べ

全ての在るモノの下に在る

月姫と魔王

聖安国の夜。

アリアは闇の気を感じて、刀を抜いて振り返った。
銀色の刀身が、男の喉元で月明かりを反射して光る。

「…会うのは、明日ではなかったか？」

呆れたように、でも嬉しそうにアリアは言う。
刀を鞘に収め左手に持つ。

男は「ククク…」と乾いた声を出し、被っていたフードを取った。

顔が露わになる。

漆黒の眼と、肩に届かない程度のやや長い髪。
着ている物も黒一色で、暗がりに溶け込んでいる。

「俺が会いたいと思ったから来ただけだ。悪いか？」

彼は「闇の王宛」の手紙を掲げ、挑戦的な視線を投げてきた。

「別に。私は構わない。心配なのは貴方だ。グイル」

「俺が？」

「見つかったらどうする？流石に私でも庇えないよ」

アリアの言葉に、グイルは目つきを変えた。
自然な微笑みが顔に出ている。

「見つかったら、そうだな：お前を連れて逃げるか」

「ふざけるな。もしそうになったら、全力で逃げてやるわ」

軽く頬を染めながら、アリアは茶でも淹れてやろうとグイルに背を向ける。

「いいのかよ」

「何が？」

「いや、敵の大将たるこの俺、闇の王に背中なんか向けて」
「？」

「後ろから襲われて、ザックリ」

グイルは「カチリ」と音を立てながら、剣を握った。

「ふん。殺気も無しにどうザックリいこうというの」

アリアはグイルにローズティー（湯呑みは和風）を差し出す。
白い砂糖の小瓶も横に添えた。

「ま、確かに。いただくよ」

「どうぞ」

グイルはお茶を「うまい」と言いながら飲んだ。

今、このふたりは殺し合いを演じる気などは全く無いらしい。

アリアなどは、茶を飲むグイルの前に座り、堂々と髪をとかしている。

「相変わらず綺麗な髪してるな。アリア」

「そう？」

「ああ」

気づけばグイルの手が、アリアの髪をさらさらと撫でていた。

アリアはグイルの頬に軽く触れ、問うた。

「何故、世界を壊したい？グイル」

「ふつ。何度聞けば気が済むんだ。お前」

「知らない。ね、何で？」

すすす…と、アリアとグイルの距離が縮む。

「何でつてねえ、理由なんて無い。

ただ、壊したいと一度思ったから壊す。壊れた世界を見たいと思うから壊す」

「…それだけ？」

「ああ。それだけだ」

アリアはグイルの胸に、軽く頭を乗せた。
グイルの心臓の音がよく聞こえる。

心地よい夜風が、部屋に入ってきた。

「会えて嬉しかった。グイル」

「また来るよ。で、闇こゝちに来る気はない？」

グイルの問いに、アリアは笑って問い返した。

「グイルこそ。光^{ひかり}に戻る気はない？」

「無い」

「じゃあ、私も答えは同じ」

「ふっ」

グイルは軽く笑うと、手すりから飛び降りて消えた。

「でも、待ってる。——ずっと」

このアリアの言葉が、グイルに聞こえたかはわからない。

月姫と魔王（後書き）

アリアちゃんの恋のお相手の登場でした。

アリアちゃんより三つ年上のお兄さんです。

ん？　そういえば夜叉はグイルと同年ですね。
あッはッはッはッは！

S a c r e d P l a c e (前書き)

茨の道を 旅人が行く

白馬に乗って

花園の道を 貴族が行く

血の滴るナイフを持って

死の旅路を 王が行く

多くの天使たちに守られて

S a c r e d P l a c e

馬車が止まった。

十字をきって、アリアは馬車から降りる。

髪は高く結い上げられ、簪^{かんざし}などの飾りを付けられている。

着物は軽い素材で、幾重にも着こまれているのに、動くたびにひらと揺れる。

腰には愛刀の、魔剣“フィアン”が吊るされている。

このフィアンは、『滅びの剣』の名で知られる魔剣で、刀身は水晶でできている。

鞘から抜き放たれると、その刀身に青い焰が現れ、水晶だが物を斬ることができるようになる。

鞘も、実は焰が形作っている物で、「抜く」というより「消える」といった形で抜刀する。

色々と言いつきの剣だが、その話はまた後ほどとさせていただく。

アリアがいるのは、大聖堂の前。

“最後の大戦”という意味の“Armageddon”という地。かつて、神とサタンとの戦場だったと云われる聖域である。

そこは、魔法界が指定している戦場で、大きな戦争の時にしか使えない。

審判者の同意も必要である。

使用方法も決められている。以下の通りである。
まず、敵国同士の王のみが対面し、両王の魔力と、審判の天秤の力で異空間を造り出す。

造られた異空間こそが戦場となる。

面積や地形などは、両王が決めることができる。

また、使用時間も決める。アルマゲドンの天気で決められる事が多い。

全ては、両王の会談によって決まるのだ。

まずは、両王が合流することから始まる。

「ごきげんよう。闇世界の支配者」

「よオ。月姫」

その場の雰囲気は、昨夜のアレは一切感じさせない程凍てついている。

「開戦はもう、避けられませんか」

「無理だな」

「そうですか。では、戦場の作成とまいりましょう。王」

「そうだな。月姫」

異空間が造られる前は、霧状の何かが満ちているだけの空間。そこに、アリアとグイルは立っている。

「規模はそんなにデカくなくていい。コロッセウム程度でいいだろ」
「いえ。半獣や巨人族、仕掛けなどのことも考えて、もう少し大きくした方が良いでしょう」

「なら、聖安国城の敷地の広さでは？数ある王城の中でも狭い方だろ」

「ふむ。いいですね。では広さは決まりですね」

地面が生まれた。

霧状の何かの寮は、少しだけ減った。

「戦う時間はいつにする？」

「私は、アルマゲドンの天気で決めた方が、何かと良いと思います」

「天気か。うん。じゃあ曇り時でどうだ」

「曇天の空の下、修羅が戦場を駆る…と。素敵です。では、曇天時で」

「雨が降った瞬間、即、その日の戦はおしまいということだ」

霧状の何かが、少量空に昇って消えた。

「で、次は土地柄みたいなのか。お花畑みたいなそーゆーことか」
「うん。それはもう、各入口だけ私たちの好きにして、主場は荒野でいいのでは？」

「オイオイ。最高じゃねえか。あつ、でも森も一応造っておこう。エルフを考慮して」

「あと、でっかい溝とかも。岩とかも」

「草原なんかも造つとくか？」
「いいですね」

その通りになった。

両端の空間が、各入口となる。装飾は可。
主に城や要塞が造られてきた。

「よし。じゃあ俺は、城を造るか」

コレは想像一つでOK。

岩が尖ったような、禍々しい城が生えてきた。

城への入り口には深い谷があり、下からは炎が上がっている。

「私は、塔と壁。そして、たまに水柱の上がる湖」

白い塔と、城壁が生えてきた。

周りには水辺が在り、草花が美しく茂っている。

「あと、お花」

湖が光輝いた。

「水に浮かぶ、優しい色の極楽の花。蓮華^{れんげ}の花」

神秘的な水辺に、大輪の蓮^{はす}の花が咲いた。

奥にもちらほら咲いている。

芳しい香りがたちこめた。

その空間は、戦場でありながら、神々しく美しいものだった。

アルマゲドンに、新しく戦場が生まれた。

禍々しい、炎の上がる黒い城と、極楽浄土のように美しい楽園。
その間に、荒野と森と草原の戦場。

その大地には 真っ赤な華が咲くだろう

その大地には響くだろう 無念の悲鳴 生を望む悲鳴が

そして 死が その大地に満ちる

これまで通りに

？

「ゲイル」

「何？」

花畑の中で、アリアは呼びかけた。

「私たちは同じだ。

たとえ善悪の名の下に、刃を交えようと、殺そうとも、結局は同じ。

殺しは殺し。奪っていることに変わりはない」

「・・・・・・・・」

「忘れてくれるな。私たちは同じだ」

強い意志を持った、両の青い目。

グイルは否定しようとしたが、その眼に見据えられ、できなかつた。

やがてアリアは、花畑の中心で蒼穹を見上げ、高らかに、美しく歌った。

今は無き、国の訛り。

滝つぼの国、独特の訛ったエルフ語の子守唄。

「何度か、死者を前に歌っていたな」

グイルが言った。

「安らかに眠れるように。これから死んで逝く者に、子守唄」

アリアは笑って返す。

金色こんじきの月が空に昇った 夜が降りる……

♪

ふたりは、恋人同士のように肩を寄せ合っている。
アリアの歌は、今はグイルしか聴いていない。
本命に届くのは、その者が死ぬ時だ。

……眠れよ 可愛い子 三日月の揺りかごで 夢の国

へ
♪

S a c r e d P l a c e (後書き)

歌、発動しました。

はてさて、戦場に散るは光か闇か。
戦乱の世が今、始まります。

オン（前書き）

嘆きの森で死者想う

哀しい貴方に白百合を

オン

今から四千年程前。

魔法界の東の果ての大陸にて。

青年の、ところどころハネた天パーの茶髪は、切られたせいで時代的にはかなり短く、現代でいえば普通の長さになっていた。

両の眼は、髪と同じく茶色。

身長は高い方だ。

彼は、乱れる呼吸を整えて、白い光の中に立つ者を見据えた。

「彼の鬼を封じろ。聖安」

彼は自分の守護霊、聖安という女性に命じた。

聖安は、細く長い指を、光の中心へ向ける。

「印^{イン}」

即座に魔法陣が出現し、力を封じられた魔物を更に封じ込めた。

「その魔物を如何いたします？ 誓^{せい}眞^ま」

誓眞は、己の守護霊の蒼っぱい目を見返した。

「来る未来のいつか、コイツには心から愛し、忠誠を誓う主人がで
きるだろう。」

それまでは俺が護り、祀つとく」

「それは、先を視た上での判断ですか？」

「ああ」

「では、その方はいつ現れるのですか？」

「俺が死んだ後」

「え？」

誓眞は、限りなく続く荒野を見渡した。

「その時まで、お前は眠っているといいよ。夢幻^{ムゲン}」

後に『聖安国』と名の付く荒れた列島の真ん中で、鬼の封じられた
札を、誓眞は固く握った。

？

二千年後（現代からは二千年程前）。

聖安国第22代王、アリア・セシリアin紅羽^{くうせい}請神社。

「な〜んでこんな事に？」

実に面倒くさそうに、アリアは向かいに座る王佐のロンドに尋ねる。

「陛下が誓眞王に呼ばれたからです」

「ハア…」

？

今朝。

『目覚めよ。我が後継者よ』

真っ白い空間に、声が響いていた。

「？」

アリアは起きた。

「んむ〜？」

誰もいないことを確認し、コロンとスグに眠り直す。

『目覚めよ。1人の乙女の目覚めし時、モンが開かれる』

また声がしたが、アリアは無反応だ。
どうやら本当に眠ってしまったらしい。

『目覚めよ…エルフの血を流す乙女』

無反応。

『……………』

「すぴ〜…」

『目覚めよっつってんだろーがアアア！いい加減起きろオオオ！！
何で二度寝してんだ？雰囲気で悟れ！空気を読めエエエエエエ
エエエエ！！！』

プチン

何か音がして、アリアが目を見開いて起きた。

「そこかアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

声を発生させていたバカに、アリアは華麗な蹴りを寝たままキメた。

「ぎゃあああああ！？」

「立ちなさいコノヤロ。何なんですか貴方。誰なんですか貴様」

冷徹にアリアが言うと、男は茶色い瞳に涙を溜めて、蹴った女を見た。

「や…やるな現王。」

聖安国初代王たる俺を蹴るとは…。しかも太もを…」

「は？初代？」

アリアは記憶を辿る。

（聖安国は確か、魔物溢るる大陸だったのを、後に王となった若い陰陽師がお祓いして開いたんだったか。

……だったか？

まあいいや。で、陰陽師の名は紅羽請誓眞くつせい）

「誓眞王？」

「そうそう。わかるじゃないか」

誓眞は満足そうに頷く。

何に満足しているかは不明だが。

「ふむ。それは失礼しました。

それで？初王が現王の夢枕に立たれるというのは、何か私に御用
が
おありで？」

「そ…うそう！」

誓眞はかしこまって座る。

「現王、アリアよ」

「はい」

「目覚めて直ぐに我が社^{やしろ}へ赴け」

「…今すぐですか？」

「いや、起きたらでいい。起きたらすぐに社へ来い」

「御意」

「待つてるぞ」

？

「新年や戴冠式じゃないのに何で」

「理由は必ずありますよ。…着いたようです。降りましょう」

アリアとロンドは牛車を降りる。

そして、長い階段を一步步づつ登……

「面倒ですね」

「ハイ？」

アリアの一言に、一歩登りかけていたロンドは振り向く。

「飛んで行きましょう」

言うや否や、アリアは羽織を脱いで、純白の巨大な翼を解放した。
普段は、魔力でしまっているのである。

「陛下…それは…」

「GO」

ロンドは発言できず、アリアに抱きつかれて空に昇った。

「到着？」

降り立った所は聖堂前。

「ロンド先生は待ってて」

「はい…」

何故か疲れた様子のロンドを残し、アリアは建物に入ってしまった。

神器（前書き）

ご覧

白い花が咲いている

夢の果ての夢の地に

赤い花が咲いている

殺戮の終わった戦場の果ての墓場に

よく見てごらん

あの華は歌っているよ

神器

奥の間までアリアが来ると、戸が勝手に開いた。

「お待ちしておりました。アリア様」

蒼みのかかった瞳に、ゆるくウェーブした長い茶髪の、巫女のような格好をした女性が話しかけた。

「お待たせしました」

アリアは律義に返す。

その言葉に、多少驚いたようだったが、何事もなかったように微笑んで言った。

「誓真がお待ちです」

誓真は祭壇の上で足を組み、堂々と待っていた。

生きている人間と、誓真王以外の死霊が許されない行為だが、やっ
てる本人は気にしない。

アリアはその前に跪く。

「美しい我が妹姫よ」

「はい。誓真王」

「大戦の始まる前に、コレを」

「？」

ひとまずアリアは頭を上げ、聖安の持つて来た物を受け取る。紫色の上質な布に包まれた何かは、細長かった。微かに、鈴の音が聞こえる。

「開け」

アリアは言われた通り開く。

「美しき我が後継者、天使の翼をもつ半エルフの姫君に」

「これは…？」

渡されたそれは、神器だった。

白く滑らかな棒身に、幾つもの水晶が繋がっている。一連に必ず一個、紫水晶か月長石などが付いている。

龍のたてがみが水晶の連より長く垂れ、棒の先端には、月長石の月が付いている。

その付け根には、金と銀の鈴が一個ずつ付いていて可愛い。

「これは？」

「神器。幣ぬさって奴だよ」

「ん？幣ぬさって、紙か葉っぱが付いてるんじゃないんですか？」

「それは、巫女や氏子が持つ奴」

「では、これは？」

誓眞はにやりと笑って言った。

「陰陽師の持つ神器だ」

誓眞が言った途端に、世界が変わった。

一瞬にして、白い世界にアリアと誓眞と聖安は立つ。

ちりん

驚いて動いたアリアの幣の鈴が鳴る。

「アリア。聖安国の現王。“外された者”」

ぴくつとアリアが反応する。

誓眞は進み出ると、「夢幻泡沫」と書かれた紙を渡した。

「それは式神。俺が建国時に封じた奴でな。名を夢幻と云う」

アリアはそれを、子猫を抱くように優しく受け取った。

何故かは自分でもよく分からなかったが、そうするべきだと瞬時に思ったのだ。

「命令だ。アリア」

誓眞の声色が変わった。

戦い前に良く聞く響きの、緊張した声色だ。

「そいつと戦い、従わせろ。そいつを負かし、その者の主となれ」

アリアは、現王が初王に逆らってはいけないことを知っている。
式神を一瞥し、頭を下げる。

「御意のままに」

「では、夢幻解放！」

式神が光って、誓真と聖安が退却した。

魔物は、虚ろな目でアリアを見た。

その身長は高いが身体はとても細く、すぐにでも折れてしまいそう。白く長い髪は、ストンと垂れていて、艶は無い。

整った顔の左半分には、大きく生々しい傷跡があり、左目を塞いでいる。

誓真とやり合った時に付けられたのだ。

それは、人間の青年のような姿をした、美しい魔物だった。

「…竜王に似てるかな」

ぼそつとアリアは言う。

「誰じゃ？」

薄い唇が動き、低い声が問うてきた。

「主は、誰じゃ」

虚ろな目に、微かに恐怖が渦めいている。

「私はアリア。アリア・セシリア・フェアリー」

アリアは、敵意のない微笑を浮かべる。
傷ついた獣をなだめるような表情だ。

「陰陽師か？」

夢幻はアリアの持つ幣を指す。

「ワタクシを封じた者が、確か、持っておった」

「誓真様？」

「然り。しかり」

夢幻は、警戒したように見てくる。
刺すような視線だが、アリアは全く臆さない。

（虚ろだ。目が虚ろ。世界を映していない）

アリアはそう思った。

「ふむ。そう言えば誓真様は、私に、貴方と戦えと命じた」
「ワタクシと……」

「戦え」に反応し、夢幻の眼に敵意が宿る。

「では、ワタクシは主を倒し、自由になる」

意志がこもった言葉だったが、相変わらず虚ろだ。

「やれるものなら、やってごらん」

アリアは魔力を解放した。

神器（後書き）

次回、バトル編。

夢幻の瞳に映るのは・・・。

魔剣（前書き）

刃を振りかざせ

斬るべきモノを斬り捨てよ

転がり堕ちろ

奈落の底へ

吹き鳴らされる 角笛を聴け

闇にこだまする光の音を 焼き付け給えよその耳に

死に逝く瀬戸際

蜘蛛の銀糸を手繰り寄せよ

魔剣

両手を刃に変化させた夢幻の攻撃を、アリアはギリギリで避けていく。

空間には終わりが無い為、逃げ道を封じる壁は無いが、同時に身を隠す物も無かった。

飽くまで誓真は、アリアと夢幻には闘ってほしいらしい。

「ちっ、私の上に就く上司はそんなんばっかか」

アリアが、ボソリと呟く。

「そちらからは攻撃をしないのか？」

「今からするよ」

余裕の笑みを浮かべ、アリアは剣の名を呼ぶ。

「フィアン！」

『待つてました。アリア様』

アリアの手に、美しい水晶の魔剣が現れた。

鞘は消え、蒼い焰のようなベールを纏い、刀身が血を欲して唸っている。

「父と」

剣が横に滑った。

「子と」

また横に滑って、夢幻を襲う。

「聖霊の御名によって」

夢幻が退き、アリアは魔剣を高く掲げ、振り下ろした。

「アーメン」

地面が一気に割れ、夢幻を呑みこもうとした。

「つつ…!？」

「ふむ。よく避けた」

着物の裾がちよつと切れてしまったらしい夢幻の眼が「今のは何だ？」と問っている。

「これは名前の無い魔剣フィアン。呼び名は『滅びの剣』。
刀匠フィアンによって鍛えられ、その刀匠の魂を取り込んだ水晶
の剣。

“呪われた剣”」

「名高い刃のようでありんすな」

「この剣は、使用者の魔力と、生き物の生命いのちを糧とする。
使用者の魔力が強ければ強い程、殺せば殺す程に、フィアンは強
くなる」

アリアは愛おしく、フィアンを撫でる。

「私が持つまでも、かなり殺してきていた。

数多の都市を滅ぼし、数多の生命を滅ぼしたこの魔剣。

封じられた事もあったが、先代によって解かれ、多くを再び滅ぼした。

付いた名前は“滅びの剣”。万物を滅ぼす魔剣」

アリアと夢幻は目を合わせる。

「ワタクシを、滅ぼしんすか」

「その気は全く無い。フィアン、二刀流！ “天界・光輪”^{こうりん}」

唱えられた途端に、アリアを囲むように光の輪ができた。

前から割れ、光の片方はフィアンと固まり、もう片方は長剣を造り出した。

二本の剣は、羽衣のように揺れる光の帯で繋がれた。

「行くよ。フィアン」

『はい』

夢幻は思った。

（遅い。やはり、所詮はヒトに過ぎぬか）

夢幻は両手を広げ、迎え撃とうとした。

だが、その行為こそ、アリアが欲しかった隙だった。

身体を低くし、空気の抵抗を減らし、加速する。

エルフの脅威の身体能力を発揮し、アリアは一気に夢幻との間合いを詰めた。

夢幻の視界から、アリアが消えた。

そして…

「——っ…！」

気づけば夢幻は、ところどころ斬られていた。

寸前で、次の攻撃は防いで退く。

「やっぱり一筋縄ではいかないか」

『傷の癒えるのも早い。ホラ、もうふさがってますよ』

フィアンの言う通り、夢幻の傷はもう完治している。

「やつかいだなあ。人には言えんけど」

『アリア様もあんな感じですからね』

傷の癒えた夢幻が、手加減なしで間合いを詰めてきた。
ガキイイイイイン

火花が散る。

「悪いね。夢幻」

「は？」

「死神の蝶」

フィアンの刀身から、大きな青く光る蝶が、数匹出てきた。
凄い速さで夢幻に迫る。

そのうちの一匹、特に巨大な蝶が、アリアの肩にとまった。

？

ロンドが、小さな鳥居の下で読書をしている。

たまに会う巫女に、軽い会釈をしたりしながら、物音しない誓真王の社の方をちらりと見た。

？

「ぐ…ぎぎ…ぎっ…」

蝶の足や口で絞め上げられた夢幻が、なんとか抜けだそうと頑張る。

「夢幻」

「ま…負けは認めない。ワタクシは、自由に…」

アリアは、その青い両目を細めた。

さっき誓真に貰った幣を、夢幻の目の前に持っていく。

夢幻の眼に、うつすらと恐怖が宿った。

魔剣（後書き）

バトルでっせ。

今回は別に血はそんなには飛びませんでしたね。

明日から学校です。

今日、沖縄は台風騒ぎのため、塾が休みになってくれたので更新できました？

携帯に溜まっている下書きの数々。

さて、いい加減に阿修羅華以外も更新しなきゃな。

夏休みよ、さようなら。

二度と戻ってこない時間よ、さようなら。

夢幻泡沫（前書き）

星の瞬く月無き夜に

響く遠吠え

遠く

遠く

夢幻泡沫

カシャアアン

イイ音がして、幣が砕け散った。
床に、大量の水晶がころころと転がる。

「よ…読めないにも程がある。お主、気は確かか？」

青く光る蝶の上で、夢幻が言った。

「アレはワタクシを封じた物。ワタクシはこれで、いつでも真の力を発揮できるのじゃ」

「知ってる。その真の力とやらで、逃げ出せることも」

「なら何故？」

驚きを隠せないらしい夢幻に、幣を壊した張本人アリアは、大したことのないような調子で言った。

「別に、逃げればいいんじゃない？」

「は？」

「聞け。夢幻泡沫。」

私は誓真様に、お前を調伏させるようにと命じられた。
意図はわからないが、私は何も、貴様を無理に下に置こうとはしていない。

だから、逃げたければ逃げてもいい。逃げられたら命令は果たせなかったことになるだけだ」

「何故？」

夢幻はなおも問う。

「私には既に、この世のモノと別世界のモノに、沢山の配下がいる。人間、エルフ、刀矢、悪魔、精霊、造られた者、魑魅魍魎など、様々に。」

私にとっては、配下が増えることは何も意味をなさないから、逃げてもいい」

当り前のように返してきたアリアに、夢幻は返す言葉も無い。そんな夢幻に、「でも」と前置きし、アリアは言った。

「夢幻。お前は逃げて、決して自由にはなれない。追われ、やがては此処に戻るようになるでしょう。」

本当の自由を手に入れることができるのは、狭い“運命”の中、必死にもがき戦い、定めを変えられる者だけ。

逃げてばかりの貴様には、到底得られぬものよ」

ややあつて、アリアの顔に悪戯っぽい微笑が浮かぶ。

「そうせ自由が無いんだから、どう？一緒に来てみない？」

「一緒に来てみない？」まるで、友達に「遊びに行かない？」と聞く調子でアリアは問うた。

「運命に囚われたこの“咎人”と、自由の果てを見に行こう」

正直、夢幻には、アリアの言っていることがわからなかった。だが、意味は容易に理解できた。

すなわち、この陰陽師は己に、選択をさせているのだ。と。

夢幻は一瞬躊躇った。

規模は小さいが“自由”を与えられたのは初めてだったから。
一瞬迷い、夢幻は選んだ。

「ワタクシは、主ぬしの式神。

我が唯一無二あなごの主よ。この夢幻泡沫、滅びの時まで主と共にあり
んす。

どうぞよしなに」

砕けた幣が、元通りになった。

？

空間が割れ、元の部屋にアリアは立っていた。
手には幣が、その傍らには夢幻がいる。

今や夢幻は、アリアのことを愛しいひとを視るように見ている。
心なしか、憑き物が取れたような清々しい表情をしていた。

「よし、アリア。おめでとう、合格だ」

「おめでとうございます」

誓眞と、その守護霊にして聖安国の名前の基である女性、聖安が拍手で迎えた。

「何がですか？何に合格ですか？」

「陰陽師の試験でありんす」

夢幻がすかさず答える。

「陰陽師になる試験は、いくつかありんす。

主様がお受けになりんしたは戦闘試験。

実際は、教え込まれた術で戦うのでありんすが、異例ということ
で」

「いや、何んでお前が仕切ってんだコラ。夢幻」

「黙りなんし。貴様には言われたくない」

夢幻は誓眞を睨む。

どうやら、アリアに気易く触られたのが気に食わなかったらしい。

それを察して、誓眞はアリアの肩から手をどけ、離れる。

意外と常識はあるようだ（by夢幻）

「では次に、幾つか式神を選んでいただきます。こちらへどうぞ」

「あつ。ちよつと待ちなんし」

案内に出た聖安を、夢幻が止める。

「主様の式神はワタクシだけで充分。それは要らぬ世話じゃ」

「しかし、使役する式神は複数持つのが陰陽師の起きてです。

ちよつと、主人を亡くしたばかりの式神もいますので、どうか、

是非」

聖安は、生むを言わせる気などさらさら無いらしい。
さっさとしてしまった。

「悪いな。昔からあんな感じなんだ」

「誓真様と似ていらっしやいますね」

「実は俺の曾おばあさまらしいからな。聖安は」
「なるほど」

納得していない様子の夢幻を引きずり、アリアは聖安の後を追った。

夢幻泡沫（後書き）

アリアちゃんと夢幻が戦ってる時、コイツらはこんなことをしてました。
←

ロンド＝読書。挨拶。

夜叉＝お兄ちゃんとケンカ。

ルカ＝ドランとおしゃべり。

ドラン＝ルカとおしゃべり。編み物。

誓真と聖安＝ひなたぼっこ。

月夜の君（前書き）

昇る朝日に夢を抱き

沈む月に儚さを抱く

流れる雲に空を想い

消えゆく闇に蛍を思ふ

月夜の君

「ワタクシだけで充分じゃ。ワタクシだけで…」

ブツブツと愚痴り続ける夢幻を末尾に、一行は御札だらけの扉の前に来た。

「え？何を封じてるの？」 的雰囲気隠すことなく放出している。恐い。

「………」

「さ、入って、式神選んで」

扉は開けられた。

入るしかないので、アリアはフィアンを握り、夢幻はひそかに指を刃に変え、入った。

誓真と聖安は、戸口で待機。

「足元、お気をつけなんし」

「うん。ありがとう」

入ると、薄暗い真っ直ぐな廊下が続いていた。
提灯ちようちんが点いたが、先がよく見えない。

ふたりは、長い廊下を歩いて行った。

三分後。

やっと半分まで来た時、ふたりの足が止まった。

「うつ…うつ…うつ…」

意味もなく血の気が引く。

「こ…これは…」

「な…泣き声…？」

「うつうつ…うつ…」

「ちょ…コレ進んでいいのか？ダメなのか？」

「進むしかないようでありんす」

夢幻が指す先には扉。ロツク済み。

「誓真様あんにやろオオオ！！」

「主。ワタクシが先導いたしんす。恐縮じゃが、後ろから」
「うん」

コツコツ コツ

足音と、泣き声だけが異様に響く。

「そういえば、主」

「うん？」

「“ありあ”とは、どういった字を書くのでありんすか？」
「漢字で？」

「しかり」

「いや、私は外国で生まれ育ったから、漢字は無いよ」
「そうでありんしたか。では、意味は？」

「意味？意味は、月夜」

「月夜？」

「そ。アリアとは、淹つばの国のエルフの方言で月明かりの夜。月夜って意味なの」

「月夜…」

ふむ、となつて、夢幻はパツとアリアに向き直った。
不気味な雰囲気にな釣り合いの、明るい表情だ。

「わかりんした」

「ん？」

「ワタクシは主を、月夜様と呼ぶのでありんす！」

そう言い放つと、夢幻はさつさと歩きだした。

足の運びが、さつきよりスゴク軽い。

そんな夢幻を見て、アリアはちょっと微笑んだ。

「月夜様。扉が見えてきんした」

アリアを「月夜様」と呼び始めて、夢幻のテンションは何故か高い。
泣き声にも臆さぬ様子で、アリアの前に立って進んでいく。実に頼
もしい。

そして、扉の前に着いた。

さっきの入り口より綺麗で、御札の類は一切無い。
しかし、泣き声はこの部屋、扉の中から聞こえてくる。

「では」

クリアに聞こえてしまう泣き声に、内心ビビりながら、夢幻は扉を開けた。

——
ギイイイイ

「うつ…くつ…ぐすつ」

月夜の君（後書き）

ついに現れた泣き声のぬし。

その正体は——！？

なんてね。

式神（前書き）

瑠璃の山に手を伸ばし

宝玉の海に身を投じ

深紅の川を遠巻きに見て

漆黒の宙が手招く

式神

部屋の中には、女がいた。

丸い形の眉の、垂れた眼、艶やかな黒髪の、和風美女だ。

人間ではないことを示すように、その頭からは、長い二本の角が生えている。

さっきまで泣いていたが、アリアと夢幻の姿を捉えて泣きやんでいく。

「キミは…?」

はんにや
「般若」

女は、そう名乗った。

「般若。何故泣いていたの?」

アリアに問われ、班やはボソボソと答える。

「私の主人が亡くなったのです。それで、悲しくて…」

「そなたの態度から見ると、その“主人”とやらは大そう立派な人間だったようじゃな」

「…はい」

般若はしゅんとうなだれる。

「“死”を知っているのか。ほお」

アリアは静かに微笑み、しゃがんで、座っている般若と視線を合わせた。

「般若。アナタはとても優しい心を持っています。だから、私はアナタが気に入りました」

「はい？」

状況を理解できないようで、般若は眼をくりくりとさせて、首を傾げる。

「私の式神になりませんか？」

アリアはまた、式神に選ばせた。

嫌なら来るな、ということだが、はたしてこの素直そうなコには断る意志はあるのかと心配になる。

が、「それはそれでいいな」と思いなおし、アリアは答えを待った。

「わたしは式神です。どうぞ、御心のままに」

アリアはその返事に、にっこりと笑って答えた。

まずは一匹。

「月夜様、何匹ここで貰えば良いのでありんすか？」

「ん。あと二匹くらいはいた方がいいでしょ」

「どのような子が欲しいとかありませんか？私でよければお手伝いしましょう」

般若がすすす…と出てきて先導してくれた。

「武器とかになる奴なんかいるか？般若？」

夢幻に声をかけられ、般若は一瞬ビクツとしたが、「はい」と答えて何枚か見せてくれた。

「弓矢、大剣、呪いの剣…ってコレ、本当に陰陽師の使うモノかなんじゃ、呪いって」

「少なくともこの三種は、私の以前仕えていた三人の主人が使っていました」

「……。般若よ。ぶっちゃけその主人とやら、退魔の方は…」

「はい。全然ダメで御座いました」

「……」

夢幻と般若は、なんやかんやで仲良くなったようだ。

「むげん。はんにゃ」

「「？」」

「私、この子たちにする」

アリアはにゅっと奥から出てきました。

その腕には、白く輝く三つの尾を持つ狐が。

その肩には、漆黒見事な、巨大な一つ目の大鴉が。

「つつ…月夜様ああああ！？」

「なななな…早っ！ワタクシ共が喋ってるうちに!？」

アリアは「ふふふ」と笑うと、

「可愛いでしょう？」

と言つて、狐の頭を撫で、鴉に頼ずりした。

「可愛いって、見た目で選んだんですか？」

「それは無いだろ！ねえ！月夜様あ！」

「能力もちゃんと見たわ！失礼なことぬかすな！」

アリアは半分ノリでキレて、二匹の紹介をはじめました。

「この子は白狐^{びゃくこ}。化け狐。幣に取り付いて剣にだってなれちゃうんだって」

この時、夢幻が般若に

「ホラ、これがホンモノって奴じゃ。これが実力者って奴じゃ」

と耳打ちし、般若は般若で納得したことは、このふたりだけの秘密である。

「この子は百眼^{ひゃくめ}。眼に映したモノを主に見せることができる、隠密が得意な子」

百眼は恐縮しながら、ぺこりと頭を下げた。

「じゃ、もういいや。撤収」

「「「はい」「」「」

こして、アリアには一気にたくさんの友達ができたのです。

ちなみに、他の式神について結構グダグダ言ってた夢幻でしたが、結局は全員とすぐに打ち解け、深い友情を築き上げておりました。

式神（後書き）

その後、ふさがっていた夢幻の左目は、アリアの治癒力によって開きました。

が、傷はそのままです。

理由は、「だって、傷あつた方が威嚇するにはちょうどいいじゃないですか」だそうです。

戦場のファンファール（前書き）

曇天の下

修羅の華々が狂い咲く

晴れか 雨には咲けぬ
血を纏った阿修羅華

一振りの剣に生を託し
風に吹かれる

紅蓮の華が舞う 散る

戦場のファンファーレ

アリアは、いわゆる裸馬だが、装飾された防具を纏うユニコーンに乗っていた。

ユニコーンは、戦場には不釣り合いの純白。

布のような防具は銀で、サファイヤやエメラルドといった宝石が飾られている。

馬上のアリアの服装は、和服なのだが、動きやすいように裾は開いていて、白い右足が露わになっている。

低いヒールのブーツを履いていて、色は着物もブーツも白だ。

来ている防具が、竜のウロコを思わせる柄で、月と星と雲が大きく刺繍されている。

手の防具にも、小さな三日月が付いていて、なかなか可愛らしい。

髪は高く結びあげられ、飾り気はないが優美な、大きな簪（実は刃が仕込まれている）が王者の威厳を滲ませていた。

傍らには、夜叉が付き添っている。

彼は、青駒に乗っていて、こちらには鞍と手綱がちゃんとある。

服装は、防御する気の無いような赤い中華服だが、その下には、丈夫で薄い鎖帷子を着用していた。

得物は太剣と、馬に付けている長剣、腰には短剣と普通の剣を装備している。

髪は結っておらず、さっきから風になびいている。

ハチマキ的なアレで、一応、邪魔にはなっていないようだ。

ルカとドランは空中戦を行うので、アリアと夜叉とは別の区で待機している。

ロンドは、珍しく洋服を着こんでいて、銀の鎧を上着感覚で着ていた。

髪は高く結っていて、金色の“封印具”が髪留めの代わりをしている。

そこは、ハルマゲドンの審判者の領。

白く優美な城の城壁内。

草木は茂り、花は咲き、透き通った湖がある。

そこは、戦場とは思えない程に、美しく、“平和”な空間だった。

闇を滅すべく集った諸皆全てが、その景色を見て溜め息を漏らした。
「これは夢か？」と問う者も、少なくなかった。

だが、決して忘れてはならない。そこが、戦場であることを。

そして、天気は、曇りだということを。

？

アリアが、フィアンを高々と掲げた。青い日が刀身を纏う。

「聞きなさい！集いし勇敢な友らよ！

時は来ました。

我らは闇を滅すべくここに集まりました。

夜の一座は、今や世界の脅威とも呼べるものにまでなってしまう
した。

我らが戦わなければ、闇は世界を呑みこみ、光は失われることで
しょう。

しかし、恐れてはなりません！

我らが恐れるは闇ではなく、自らが闇に吞まれること！
愛する者を護れぬこと！

剣を取れ！闇を斬りつけよ！

命を奪うその剣で、愛する全てのものを護りとおせ！！」

歓声があつた。

誰も、「何を、女が偉そうに」などと言う者はいない。

その時夜叉には、アリアが、魔法界の神話に出る“月女神”に見えていたのだ。

月と、守護と、女と、狩猟、森を司る女神に。

勝利を呼ぶ、月女神に。

その場にいた者全てが、そう思った。

天と地で、激しい戦いが繰り広げられている。

ドランや、ほかのドラゴンの半獣は、空中戦を行い、敵を空から攻撃していた。

ルカも空中で、本物のドラゴンの手綱を握り、敵との空中戦を行っている。

遠距離攻撃部隊は、弓矢や魔力を使つての遠距離攻撃を行い、味方を援護。

ロンドは、単独行動要員だったので、一人ではさばつたと敵を倒している。

ちよつと余裕ができると、血液をいただいたりもした。

彼は、吸血鬼だからである。

他の吸血鬼のごはん確保もしてあげているのだ。

アリアは、ユニコーンに乗って、ゆっくりと戦場を進んでいた。

夜叉は、アリアにくつついて護っている。

「夜叉」

「なんだ？」

「大丈夫？」

アリアは、そう聞いた。

なぜなら夜叉は、戦闘民族の刀矢で、こういう場では、血が騒いで仕方がないはずなのだ。

こんなにゆっくり進んでいては、本能がもたない。

案の定、彼のルビーの目には、戦いたいという欲求が見え隠れしていた。

「いっておいで。ただし、死ぬなよ」

「…悪い」

夜叉は、これ以上そこにおいては本能が爆発するなと悟って、そそくさとアリアから離れた。

移動魔法で愛馬を城に戻し、暴れ始める。

荒々しく、破壊そのものを楽しむように、彼は剣を振るっていた。

だが、一体誰が気づいたであろう。

夜叉の眼に映っているのは、目の前の獲物共ではなく、敵の真ん中に降り立ったアリアであることを。

「フィアン。いくよ」

アリアの身体から、殺気が放たれた。

それは、ベールのようにアリアを包み、もうひとつの鎧となつてまとわりついた。

一座の者は、一瞬、ひるんでしまった。

その一瞬、風が通り抜けた。

彼らが振り向くとそこには、白く大きな翼を持つアリアがいた。

その幻影を最後に、彼らは絶命して、身体は塵となつて消えた。

それが、一座に入った者の、死後の定めである。

そうして、その者がどこから来たのか、何処で生まれ、どんな闇をもっていたのかという事柄は全て、闇に葬り去られるのだ。

アリアの剣は、青い残光を残しながら舞う。

囲まれれば、一人をジャンプ台にしてやや高く跳び上がり、回転し

ながらその場の全員を斬る。

アリア自身は、傷つけられてもすぐに治る治癒能力をもっているの
で、ケガをしてもそんなに支障はでない。

さつきちよつと足を斬られたが、痛みも感じないしもう治ったので、
死の舞踏を続行する。

斬って斬って斬りまくり、振り向きざまに、小さな声で、斬った者
に言う。

「来世では、よい生を」

戦場に、花が咲いた。

真っ赤な真っ赤な紅の花が。

戦場に、華が咲いた。

地に踊る白い華が。

咲いた。

ひとは、彼女を畏怖を込めてこう呼んだ。

「戦場の銀蝶」と。

踊る舞台は戦場。

色は刃、切っ先の銀。

月にたとえられる生き物の中から「蝶」を選んだ。名。

曇天の下 修羅の華々が狂い咲く

晴れか雨の時には咲けぬ 血を纏った阿修羅華

一振りの剣に生を託し 風に吹かれる

紅蓮の華が舞う 散る

ガン！と、アリアの刃とグイルの刃がぶつかった。

恋い焦がれ、しかし、互いの心に気づけぬふたりは、再び戦場で会った。

「おかしいねえ。普通、王は安全なところで高みの見物してるモンじゃないのかイ？」

「グイル…いや、魔王よ。貴方も出てきてるじゃあないか」

「ああ。お前に会いたくって来ちまった」

「……」

一旦離れ、再び剣をぶつけ合う。

どうやら、グイルのも魔剣らしい。魔力が刀身をどす黒く染めている。

「その剣、お手製？すごいじゃない」

「そりゃどうも」

魔剣は、魔力を吸う物質を鉄に混ぜて造る物。

魔剣に込められた魔力は別として、その物質と、物質に合う鉄を見つけるのは大変だ。

どうやって見つけたのかと思ったが、それはそれ、恐らく、どこから盗んできたのだろう。

「ちなみにこの魔剣はな、俺の魔力とお前の先代の審判者の魔力と命でできている」

グイルは突然、そんなことを言ってきた。

そうか、と、アリアは思い出す。

「先代、“ようおう陽王”は、グイルが殺したんだったか」

「ああ。でも奴の死を無駄にはしていない。見ろや。この剣の威力」

グイルは剣を振って、魔力を飛ばした。

アリアのフィアンの青い攻撃とは違って、グイルの攻撃は目に見えない。

アリアの味方軍はあっさりと倒れた。

慌ててアリアは、遠いその場所から治癒の術を掛けた。

だが何人かは手遅れだったらしく、治った人間が死んだ仲間の名前を呼んでいた。

「凄いな。よくこんな遠くから正確に味方を治療できるな」

そのほめ言葉に、アリアは無言で返した。

そして、まじまじと自分を思う。

「私は、こんなに残酷なこともできる男に惚れているのか」
改めて気づき、おかしくなってきた。

「グイル、私は…」

ポツリ、と、雫が落ちてきた。

アリアは言いかけた言葉を呑みこみ、空を見上げる。
グイルもまた、空を見上げていた。

「今日の分はここまでか」

グイルはそう呟いた。

撤退の角笛が吹き鳴らされ、敵味方全てが、ハルマゲドンから追い出される。

アリアとグイルは撤退の途中で振り向いて、目が合った。
一瞬時間が止まって、やがて、動き始めた。

次に招かれる時は、アルマゲドンに厚い雲がかかるその時だ。

戦場のファンファーレ（後書き）

あんまり、流血沙汰にはならなかったですね。
すいません。

幻に見て（前書き）

鴉が一羽 鳴いていた

飛びたいらしい

翼の折れたその鴉

鳩の落とした羽根を拾い

わたしは

その背の翼で空を駆る

幻に見て

暖かな日差しが、木漏れ日となって地を照らしていた。

ベリーの群生したその森の空間の地に、エルフの男がひとり、倒れている。

銀色の長い髪をしたエルフで、顔は長い前髪で見えない。

それでも、綺麗な顔立ちをしているであろうことはわかった。

アリアは彼に近づく。

そつと彼を覗きこむ。

そして、その手に握った短剣で、彼の胸を刺した。

「――」

聖安国の居城で、アリアは目が覚めた。

荒い呼吸のまま、自分の手を見る。
生き物を刺した感触が、いまだ鮮明に残っている。

震える手で、額に浮かんだ汗をぬ拭い、力無く立ちあがった。
そしてフラフラと、障子を開けた。

空は、夜明け前で薄暗い。銀色の月が儚く浮かんでいる。

（私の世界のような。…じゃあ、あの月は私か？）

そう思って、ふっと笑う。

（あの月は…昼に消えるのか）

冷や汗で濡れた身体を、ひんやりとした朝の風が優しく触ってくれる。

薄暗い空を見上げていたら、荒かった呼吸は、ようやく落ち着いてきた。

心臓はまだ、早鐘のごとく波打ってはいるが、じきにおさまるだろう。

う。

でも、しばらくは声が出せないらしい。

数度口を開いて「あゝ」と言おうとしたが、出たのは息だけだった。

しかたないなと諦めて、再び布団にもぐる。

夢を見て、声が出なくなった経験は何度もある。

三回目あたりからやってる対処法は、「寝る」だ。

じっとしていれば、いつの間にか治ってるものなのだ。

（なんだか、久しぶりだな。コレ）

こんな現象が起きたのは、聖安国の玉座に就いた時が最後だった。

あれから、幾らか月日が過ぎ去ったが、今日という日まで一度も無かった。

目を閉じて、夢に見たエルフを思い出す。

微笑んで、抱き上げてくれたエルフ。

剣を振るう姿は優美で、幼かったアリアはその円舞を見て喜んだものだ。

色々な事を教えてくれて、たくさんアリアを愛してくれた。

「剣は、殺すための道具だ。

どれほど美しく飾りつけようが、どれほど名が知られようがそれは変わらない。

死んだ者は生き返る術を知らない。二度と目覚めない。失った命は戻らない」

だからこそ、と、彼は続けた。

「強くあらなければならぬ。
肉体がではない。魂が。」

しっかりと、目を開いていなければいけない。
斬るべきモノを斬り、護るべきモノを護れるように」

「強くあれ」と、彼は言った。

「私は、強くなりたい。

願わくば、世界で最も強いと云われる程に」

「何故？」

「.....」

アリアは黙って、それから、真っ直ぐ彼の眼を見て言った。

「愛がために」

彼は優しく微笑み、アリアを撫でた。

「お前はこれから、もっと苦しむことになるだろう。

その苦しみは、やがて、お前を完全たるものへと変える。

その闇を負い、在り続ける。

それでも、お前は立ち止まることは無いのだろうな。アリア」

「立ち止まる術など、とうの昔に忘れたよ。父様」
とてらま

彼は、息をついた。

「アリアはもう、充分強いよ」

やがてアリアは、すうつと目を開けた。

「私は、強くなかないよ。父様」

？

「おはよう！アリア。

今日はアルマゲドンは快晴だって。出陣は絶対ないからどっか行こうぜ」

朝食の後、実は昨日の戦いで、内臓が出るほど負傷した夜叉が、そんなことを言ってきた。

「大丈夫なの？夜叉」

「ああ。やっぱりアリアの治療術はスゴイな。かけられてすぐに治ったもん」

「うーん。でも、安静にはしといた方がいいんじゃない？」

夜叉は、そんな言葉を綺麗に無視して、アリアの手をとった。

「行こう」

昨日の暴れっぷりからは想像もできないほどの、無邪気な笑顔。末っ子として甘やかされてきた夜叉の、可愛らしい特徴の一つだ。

どうやら大丈夫そうなので、アリアは笑顔え頷いた。

？

移動魔法を発動し、アリアと夜叉は国外に出た。

出たそこは、霧で覆われている。森の中のようだ。
おおきな滝が近くにあるようで、水が落ちる音が大きく聞こえる。

アリアは慣れた様子で、階段状の岩を登って行く。
まるで、妖精の飛翔のような軽やかで美しい動きだ。
やっぱり混血でもエルフなんだなと夜叉は思う。

夜叉も、苦戦しながら登っていった。

たまに木に移って登ったり、また岩に映って登って行ったりをくり返す。

飛んだ方が絶対早いのだろうが、アリアはあえて、翼をしまつて登って行く。

夜叉は、コレはいい運動だなと思っているので、何も言わない。
実は夜叉は、刀矢族にしてはエルフの如く細身で、兄と父に比べると結構ガタイは小さい。

それを補うように、刀矢族にしては珍しく強い魔力を持っているが、本人はそれをコンプレックスにしているのだ。

崖を登ってちょっと。

頂上に近づくにつれ、霧はまるで、王の帰還を喜ぶように退いていった。

薄い、空の青が見える。

眼下に世界が広がった。

幻に見て（後書き）

H A P P Y ハロウィン！！

と、いうことで

『阿修羅華キャラが仮装するならコレじゃね？』祭りイイイイ！！

？アリア・セシリア・フェアリー

天使 化け猫 お姫様？ シスター

とにかく可愛い奴なら何でも可（byルカ）

やるなら化け猫がいいな。で、お姫様って何よ？（byアリア）

？夜叉

悪魔 化け猫 王子様？ 神父

アリアとワンセットになれる奴なら何でもいい（by夜叉）
きつとなんでも似合うよ！（byドラン）

？ロンド・スプラチエル

執事 騎士 エルフ 犬 中華服 お医者さん

とにかく役に立つ制服がいいですね（byロンド）

先生は何でも似合いますよ（byグイル）

私としては教師服をまた見たいですね（byアリア）

？ルカ・セントルイス

悪魔 医者 悪魔 騎士 悪魔 執事 悪魔 天使 悪魔
全部捨てがたいですね。何にしましょう（b y ルカ）
何で各衣装の間に必ず悪魔が入ってた？（b y 夜叉）

・・・・（b y ドラン）

？ドラン

竜 犬 猫 ゴースト 鼠 カボチャ お姫様

ちよっ…何でお姫様が入ってたんだ！私はオスです！（b y ドラン）
ツッコむとこそそこ？（b y 夜叉）

最後の奴以外全部被りモノですか（b y ルカ）

？ゲイル・ジャステイス

海賊 悪魔 死神 葬儀屋 ミイラ男 王子様 高杉晋助

オイ、最後のこの蝶柄の和服は何だ？仮装か？（b y ゲイル）

なんか、包帯で左目隠せってあるけど（b y アリア）

ん？未来からの輸送品って書いてありますよ（b y ロンド）

つか何でお前がいるんだコラ。帰れ（b y 夜叉）

だとコラ。やるか？（b y ゲイル）

ちよっと、なんかこっちにも一杯きてますよ。（ルカ）

何？何？うわっ！（アリア）

『銀魂コーナー』

坂田銀時 神楽 桂小太郎 土方十四郎 沖田総悟 定春 エリザ
ベス 坂本辰馬 高杉晋助 その他

『ワンピースコーナー』

ルフィさん ナミさん サンジさん ゾロさん ロビンさん チョッパーさん ウソップさん あと誰と誰と誰？

『ブリーチコーナー』

一護さん ルキアさん …… あと… なんかいっぱい。

『黒執事コーナー』

セバスチャン・ミカエリス シエル・ファントムハイヴ（女装版あり） ラウ ランマオ アンダーテイカー 葬儀屋 グレル・サトクリフ その他

『ナルトコー

もういいわア！！ っただけ衣装きてんだ！！ っからきてんだ！（夜叉）

落ち着いてください夜叉。 とりあえず… 「ミライ」からきてるみたいですよ？ 聞いたことのない国名ですね（ルカ）

ちよっ！ この「桂小太郎」さん髪長い！ しかも綺麗！ きゃー？ はっ！ 「葬儀屋」さんも… 「吉田松陽」さんも…？ （アリア）

長髪の人好きですもんね。 アリア（ドラン）

…（ゲイル）

見てください！ 姫様！ 「セバスチャン」の奴着ました！（ルカ）

おお。 執事服。 羨ましい（ロンド）

姫様は是非、この「シエル（女装ver）」を！（ルカ）
うっわ。 派手…（アリア）

いいからさっさと着換えろや。

次元を超えるのどんだけたいへんだと思ってんだ。

と、いうことで、（無理やり）数分後。皆、着替えました。

アリア：化け猫

（無難そうだったから）

夜叉：桂小太郎

（アリアが特に気に入ってたから）

ルカ：セバスチャン・ミカエリス

（着ている奴から自分と同じ匂いがしたから）

ドラン：真選組隊服（沖田）

（着てみたかったから）

グイル：高杉晋助

（自分と同じ匂いがしたから）

ロンド：お医者さん

（執事がよかったんですけどね、カブリたくないですし）

…まあこんな感じになりました。

皆様も、ハロウィンをお楽しみください。

h
a
v
e

a

g
o
o
d

n
i
g
h
t
?

帰郷（前書き）

水面に映る 空が揺れる

鏡に映った 世界が碎ける

瞳に映る 世界が変わる

帰郷

霧が世界を覆っている。

大量の水が轟音とともに下に落ちていく。

空気は冷たいが寒くはない。むしろ、気持ちいいほどだ。

そこは、滝つぼを見下ろす滝の上。

大きな水のたまりが、大河の流れの前に存在している。

巨大な水のたまりは、少し前までは土地だった。

だが今は水中に沈み、湖のようになっている。

水は透き通り、水底の水草や地面が綺麗に見える。

泳ぐ魚はまるで、宙を浮遊しているかのようだ。

だんだんと、遠くの方も霧が晴れてきたので、滝つぼと湖と河の全体が、ゆっくり見えてきた。

白い大木が丘に立っている。滝つぼの国のご神木だ。

その木の向こうにもうひとつ丘があり、そこには、かつての滝つぼの繁栄が残る、美しい城が堂々と建っていた。

「綺麗だ。まるで、国が生きているみたいだ」

あまりにも堂々としている、かつての王城を眺め、夜叉はぽつりと呟いた。

アリアは驚いたように夜叉を見上げ、すこし笑うと、言った。

「滅びたのは国。土地はまだ、生きてる」

？

滝つぼの国のむかしはなし。

かつて、滝つぼの国は豊かな国だった。

国土こそ小さいものの、水も食べ物も豊富で、住みやすいそのエルフの王国は、地上の楽園だった。

当時、エルフと人の間に生まれた半エルフは、差別の標的だった。

エルフにも、人間にも相いれない時代だった。
が、淹つぼの国は違っていた。

迫害され逃げてきた者を、無条件で国民として迎えた。
半エルフだけではない。その両親、人間も共に迎え入れた。

そして、その淹つぼの王女アリア・セシリアは、半エルフだった。
アリアは、叔父である王の死と同時に王位に就き、国を正しく治めた。

ところが、この豊かなくにを狙う者がいた。

“呪われた国”と称された、侵略国である。
その国は、すでに五つもの国を手に入れていたが、ついに、前々から狙っていた淹つぼの国にまで手を出してきた。

国を愛する民は、率先して戦った。

エルフは人間よりもはるかに身体能力が高い。

その上、戦場は住み慣れた国土だ。戦いは優位に進むはずだった。

それでも、淹つぼの国の騎士団長が殺されたと同時に、すぐにその戦いは終わった。

騎士団長、アラモア・ライオネスというエルフは、本当に強い男だった。

主君を護り、国を護り続けてきた騎士だったが、敵軍に囲まれ、身体に数十発以上の銃弾を打ち込まれ、殺されたのだ。

敵国は、エルフが優れているのを知っていた。

だからこそ、最も強いものを孤立させ、彼を囲んで殺したのだ。

アラモアの首は斬られ、アリアの元に贈られた。

「これ以上戦っても無駄だぞ」という、警告だった。

まだまだ少女であったアリアは、彼の首を胸に抱き、そっと、彼のロザリオと共に燃やした。

灰は、大いなる滝つぼの清流に流した。

滝つぼの国が創られた時に生まれた、騎士団長の聖剣は、現王であったアリアが折って壊した。

その時アリアは、決して涙を流すことなく無表情であったという。

その悲しみは、アリアから涙すらも奪ったのだった。

その日の夜。アリアは、民に「国外へ逃げろ」と告げた。

聖安国に、すでに移住の許可をとってあったのだ。

勿論。民は国を捨てるつもりはなかった。

どうせ死ぬなら、国と共に死ぬとまで言い出したのだ。

ところが、アリアは言った。

「生きてください。それが、残された者に贈られた、死者の祈りです」

その言葉を聞いて、皆は黙った。
少女王の言った事はまるで、死者が、王を通して告げている祈りのように聞こえたのだ。

事実。アリアは多くの死者の祈りをしよってそこに立っていた。
それが、民に届いたのだ。

一夜のうちに、民は家ごと国を去った。

そこに残っていたのは、ただただ、広いかわからないが、美しい滝つぼの大地だった。

アリアは、大いなる魔力と精霊の力を借りて、大地を削りくぼませ、地形を変えた。

滝を大きくして、水量を増させ、国全体を水で覆った。

城と御神木だけは残しておいてくれとの、強い要望があつたので残しておいた。

こうして滝つぼの国は、愚かな侵略者に侵される前に、王によって滅びをもって救われたのだ。

おしまい。

？

ハープの音色が、静かだった城に響いている。

奏でるのは王。

国は久しぶりに、少女王の歌を聴いた。

）
♪

白い木に登って 風を感じた

眼下を流るる大河

大いなる滝つぼ

深い森に守られ

滝の向こうに住まう わたしたち

耳に響く水の音

生まれた頃から 聴いていたの

蛍が夜に飛んだ

流れ緩やかな水面で

大木の下で

歌い踊り

楽の音を奏でた

水の向こう

深い森の中心に

わたしたちは 住まう

深い森の中 滝の中に

わたしたちは 住んでいたの

むかしむかしに 住んでいたの

♪

？

「ん？」

とある国の外れにて、子供が首をちょこんと傾げた。

「どうしたの？坊や？」

母親が寄り、優しく子に問う。

「あのねあのね。今、お歌が聞こえたよ？」

「え？」

子供が指さす先を、母親は見た。

そこには、豊かな森が広がっているだけだった。

「女の子の声だったよ。すっごく綺麗だった。でも、終わっちゃった」

しゅん、と、子供はうなだれる。

正直、さっきまで聞こえていたのは歌かどうかなんてわからないが、もう少し聴いていたかったのだ。

母親は、そんな子供の頭に優しく手を置き、笑って言った。

「それはもしかしたら、妖精のお姫様のお歌かもしれないわ。この森にはね、それはそれは可愛い、妖精のお姫様が住んでいるの。」

そのお歌を聴いた人には、いいことがおきるんですって」「ホント？ボクにもいいこと、おきる？」

母親は、「ええ」と言った。

「私は、あのお姫様のおかげで、幸せになれたんだから」

子供は「え？」と首を傾げて、エルフの母親を見た。

母親は、森の向こう。美しい滝つぼのある故郷を思って、微笑んだ。

「アリア・セシリア・フェアリー様……」

それはかつて、彼女が仕えた王の名。

そして、彼女の言う、「妖精のお姫様」の名だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1533m/>

阿修羅華

2011年6月6日05時16分発行